

同窓会会報

高知県立大学看護学部

第8号

平成26年3月20日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



高知公園(高知城)の山内一豊の妻・千代像

ごあいさつ

同窓会会長 梶原和歌

私が同窓生だったら、この表紙欄では南裕子学長に母校大学の近況や所感を語っていただけたらと思いますが、編集会議で決まりましたので、改めて平成26年のごあいさつをさせて戴きます。

さて高知県立大学の発祥は「高知県立女子医学専門学校」です。アジア太平洋戦争の最中、昭和19年、日本本土への米軍空襲が本格化した時期、銃後を担う女子を対象として設立されたものでした。戦後発展的に県立女子専門学校を経て昭和24年高知県立女子大学となり昭和27年に看護学科が増設され、日本での看護大学第1号ということをご承知の通りです。

今や看護系大学の数は201校、来年には228校になりますが大学単位で開催されている看護学会の沿革が40回という実績も素晴らしく、それぞれの時代に卒業生一人ひとりが努力研鑽されて道を拓いてきた結果だと思い、母校大学での先生方の努力・忍耐・ご指導に改めて感謝します。

これからの社会保障制度・医療・介護の体制は、2025年を見据えて大きく変化しようとしています。卒業生は目線を国民に、隣人に家族に置き換えて、真の健康護り人としての役割をそれぞれの地域で創出して戴きたいと思います。特に何にも増して平和が脅かされないように、かつての「従軍看護婦」が「災害医療派遣ナース」に置き換えられないように感受性と知性・効果的な行動力を身につけて下さい。「平和」はヘブライ語で「シャーローム」というそうで、「平安あれ」と訳されているそうです。戦争がないだけでなく、内面的な「平安」の意味も込められているそうです。人間の内面にシャーロームが実現するように為政者だけでなく広く文化人の語りにも、大いなる天の声にも耳を傾けたいものです。



主な内容

- ① 同窓会会長ごあいさつ
- ② 災害看護学教育のスタートにあたって
- ③ 高度実践看護職者の養成教育
- ④ 大学の国際化に向けての取り組み
- ⑤ 卒業生と大学との共同プロジェクト
- ⑥ ようこそ 先輩！
- ⑦ 高知女子大学で教員としてご指導いただいた先生方からのメッセージ
- ⑧ 夏銀河～学生ボランティア活動支援



Disaster Nursing
Global Leader
Degree Program

大学院博士課程 “災害看護学教育”のスタートにあたって

中山洋子 看護学研究科共同災害看護学専攻 特任教授

平成24年度に博士課程教育リーディングプログラム(文部科学省)として採択された「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」(Disaster Nursing Global Leader Degree Program、以下、DNGL)は長い準備期間を経て、平成26年4月から新生を迎え、開講する。DNGLには、大学院看護学研究科博士課程共同災害看護学専攻として、災害看護学の構築、5大学(高知県立大学・兵庫県立大学・千葉大学・東京医科歯科大学・日本赤十字看護大学)の共同大学院、5年一貫の博士課程、グローバルリーダーの育成、テレビ会議システムを活用した遠隔授業、産官学連携の下に行う国内外のインターンシップ等々、新しい試みがたくさん盛り込まれている。高知県立大学はDNGLホスト大学として、南裕子学長をはじめ、プログラム責任者の野嶋佐由美副学長、プログラムコーディネーターの山田覚教授、高知県立大学DNGL責任者の藤田佐和教授、神原咲子DNGL准教授、事務局法人経営室(DNGL管理センター)竹内裕司主幹を中心に看護学部、社会福祉学部、健康栄養学部、文化学部の多くの教員、事務局員の努力と協働によって世界が注目する災害看護学という分野で先進的な取り組みに挑み始めたのである。



DNGLのことについては、同窓会会報第6号(平成25年3月15号)でプログラムコーディネーターの山田先生がその概要を紹介しているので参照していただきたい。ここでは5年間の共同大学院の教育課程で、どのような能力を持つ人材を育成するのにかについて触れたい。

DNGLでは、期待する人材として、①人間の安全保障を理念として、いかなる災害状況でも「その人らしく健康に生きる」ことを支援することができる人材、②災害サイクル諸局面において「健康に生きるための政策提案」に取り組むことができる人材、③グローバルな視点から安全安心社会の実現に向けて、産学官との連携を築き、制度やシステムを変革できる人材、④学際的な視点、国際的な視点から災害看護学を構築し、災害看護学を研究開発できる人材、を掲げている。

以上の4つの能力を有する看護専門職者を想像するとDNGLにおいては、柔軟性に富み、高い倫理観と見通しを持った変革力・政策力のある人材の養成が求められていることがわかる。しかもグローバルリーダーであるので、国を超えてその活動ができる人である。5年間のDNGLの教育によってそのようなリーダーを養成できるかといわれれば、その芽を育てることはできるかもしれないが、その成果は、社会に出て活動してからになるであろう。

今、私たちにとって大切なことは、グローバルリーダーを養成できる土壌をどのように作っていくかということである。教育を提供する側が、従来の看護学教育の既成概念を外し、どのくらい斬新的で柔軟な発想をすることができるのかは、このプログラムの成功の鍵といっても過言ではない。私は“規格外”という言葉が好きであるが、DNGLは規格外の看護学教育への挑戦であると受けとめている。

南裕子学長をはじめとするグローバルリーダーを輩出してきた高知女子大学が、高知県立大学として新しい時代に向け、地球規模で活躍できるグローバルリーダーの養成に取り組むことは使命であるようにも思える。高知女子大学家政学部看護学科を創設した和井兼尾先生は、私たちに次のようなメッセージを残してくれた。「教育において重要なことは、自分(教師)を超える人材(学生)を育てることであり、活躍する卒業生が、私(教師)にとっての業績である。」今後、グローバルに活躍できる看護専門職者を高知県立大学からどのように輩出できるのか。

10年、20年、いやもっと長くなるかもしれないが、このプログラムが創造的で先駆的であったと言われるようなものにしたいというのが、この1年、DNGLに携わってきた私の願いである。教育の成果はすぐには現れず、長い時間がかかるということを高知女子大学は教えてくれている。そこには看護学の発展のために果敢に新しいことに挑み続けた先駆者たちの“勇気”と“忍耐”があったことを忘れてはならない。

大学院看護学研究科における 高度実践看護職者の養成教育

本大学院における高度実践看護専門職者の養成教育の経緯

専門看護師の教育は、看護系大学の大学院修士課程で、日本看護系大学協議会の認定を受けた教育課程において行われ、現在、11の分野で養成が行われています。

高知県立大学においては、1998年4月、高知女子大学看護学科(平成23年4月高知県立大学と名称変更)が、学部へと独立し、池キャンパスへの移転とともに修士課程として看護学研究科が設置され、それを期にCNSの養成教育がスタートしました。

開設当初は、家族看護、精神看護、がん看護、小児看護、地域看護、老人看護の6領域であったのが、その後、慢性看護、在宅看護が加わり、さらに平成25年度からはクリティカルケア看護と増え、現在は9領域でCNS養成教育を行っています。11分野でCNSが養成されている中で、本大学院のように多くの専門領域を整えている大学院は、決して多くはなく、この点は、本大学院の誇れるところです。

専門看護師になるためには、大学院を修了した後、日本看護協会専門看護師認定試験に合格することが必要です。専門看護師は、下記の6つの役割を担い、主体的かつ幅広く卓越した活動を行っています。そして、専門看護師は、5年ごとに実践、研究業績などをふまえて、資格の更新をすることが求められています。

また、本大学院の看護管理学領域では、大学院修了後、日本看護協会の認定看護管理者認定試験を受けて合格すると、認定看護管理者の資格を取得することができます。取得した修了生は、全国各地の医療機関において、看護管理者として優れた資質を基盤に、組織を改革し、創造的に発展させるさまざまな活動を行っています。

わが国における専門看護師養成教育の経緯

わが国の長い看護師養成教育の歴史において、スペシャリストの育成が検討されたのは1990年初頭からであり、専門看護師(Certified Nurse Specialist : CNS)制度として発足したのは、1994(平成6)年です。

保健医療・看護の知識や技術が、ますます複雑化・高度化し、人々のヘルスケアニーズも多様化するなかで、より質の高いサービスを提供することが求められるようになってきたことがその背景にあります。

CNSの役割

1. 個人、家族及び集団に対して卓越した看護を実践する。(実践)
2. 看護者を含むケア提供者に対しコンサルテーションを行う。(相談)
3. 必要なケアが円滑に行われるために、保健医療福祉に携わる人々とのコーディネーションを行う。(調整)
4. 個人、家族及び集団の権利を守るために、倫理的な問題や葛藤の解決をはかる。(倫理調整)
5. 看護者に対しケアを向上させるため教育的役割を果たす。(教育)
6. 専門知識及び技術の向上並びに開発をはかるために実践の場における研究活動を行う。(研究)

本大学院を修了した高度実践看護専門職者

(2013年12月)

領域	がん看護	家族支援	慢性疾患看護	精神看護	地域看護	老人看護	小児看護
専門看護師数	27	8	2	15	2	2	9

2014年現在、わが国の専門看護師総数は、がん看護(515名)、精神看護(179名)、急性・重症患者看護(147名)をはじめ11分野で、1273名である。

認定看護管理者	15
---------	----

大学の国際化に向けての取り組み

インドネシア ガジャマダ大学訪問について

平成25年12月23日～29日にインドネシア国立ガジャマダ大学へ、社会福祉学部長澤紀美子教授・看護学部高谷恭子助教・小原弘子助教の3人で視察に行っていました。視察の目的は、平成26年4月に開校される「高知県立大学大学院看護学研究科共同災害看護学専攻(以下DNGL)」における、インドネシアの連携校であるガジャマダ大学との教育研究連携体制構築に向け、DNGL院生のためのフィールドワーク・プログラムに関する情報収集や、国際的な共同研究体制構築のための研究テーマや内容の検討でした。

ガジャマダ大学は、インドネシア国ジャワ島中部南岸に位置しているジョグジャカルタ市にあります。ジョグジャカルタ市は、人口約60万人で、住民は独自の文化と歴史を尊重する敬虔なイスラム教徒が大多数を占めます。インドネシアでは2004年のスマトラ島沖地震による津波、ジョグジャカルタにおいては、2006年のジャワ島中部地震や1548年以来68回噴火を繰り返しているムラピ山の噴火というように、災害を幾度となく経験しています。ガジャマダ大学看護学部は、このような中で、災害看護の実践・研究が盛んな大学です。2006年のジャワ島中部地震では、大学の建物が医療救護施設となり、実際に医療処置の必要な被災者を収容していました。

私たちは、現地に5日間滞在し、修士課程の講義に参加し、看護学部の紹介・看護研究内容の紹介・日本における在宅ケアの紹介を行い、ガジャマダ大学教育病院の見学をさせていただきました。また、災害活動に関しては、ムラピ山噴火記念博物館・被災地域の見学、2006年のジャワ島中部地震後神戸大学と共同で支援プログラムを展開している「こどもの家」の見学をさせていただきました。

修士課程の学生は皆、日本の看護や看護教育にとっても関心が高く、学校紹介で説明した学部教育について、また、看護研究の紹介で説明した日本の看護の現状について、私たちの発表をとても熱心に聞いており、多数の質問をいただきました。教育病院の見学では、インドネシアは日本と違い、公的医療保険制度が充実していないため、看護だけでなく、日本のシステムに対する関心が高く多数の質問をいただきました。

いよいよ教員間の研究交流、大学院生の交流が開始されます。お互いの情報を共有し、自身の国の現状に合わせてどのような研究・看護実践を展開するのか共に考えられる関係性を構築したいと思います。(小原:記)



ガジャマダ大学正面とムラピ山



看護学部・看護研究の内容の紹介などを行う、長澤教授・高谷助教・小原助教



修士課程学生と記念撮影

高知県立大学の国際交流協定校

アメリカ：エルムズ大学、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校、カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部
中華人民共和国：華中師範大学、北京聯合大学旅游学院
中華民国：文藻外語学院
モンゴル：モンゴル国立科学技術大学
イタリア：ヴェネチア「カ・フォスカリ」大学アジア・北アフリカ学科。
マレーシア：サバ大学
インドネシア：ガジャマダ大学

卒業生と大学との共同プロジェクト

高知県保健師交流大会 ～こじゃんとエンパワーメント～

平成26年1月25日

昭和16年に保健婦規則が制定され、20名から始まった高知県の保健師活動は、現在388名に達しています。今回、教育機関・職能団体・実践現場の保健師が実行委員会を立ち上げ、「高知県保健師交流大会」を企画し、実施しました。高知女子大学の卒業生は、実行委員としてリーダーシップを発揮し、当日の運営やシンポジウム・分科会で活躍しました。

大会は、20代～50代の200名の保健師が参加し、積極的な意見交換が行われました。

高知県の保健師活動は、保健師駐在制によってアウトリーチ活動を実践してきた歴史を持ち、そのマインドは、本質的な保健師の核といえます。私たちの歴史の中にある本質を継承し、変化する社会のニーズに貢献できる新たな活動を創造していく方向性を見つめることができた大会になりました。(時長:記)



シンポジウム	「今、大切にしたい保健師マインド」 ～専門性がぶれない活動を目指して～
ワールド カフェ	「明日へつながる関係づくり」 ～「カフェ」で行うような自由な会話を～
分科会①	「家庭訪問」 ～なぜ保健師がするのか～
分科会②	「多職種連携」 ～保健師はどんな役割を期待され、果たしているか～
分科会③	「地域を知ってつながろう」 ～活動の原点、地域を知って好きになる～
分科会④	「地域活動支援」 ～個別課題を地域活動にどうつなげるか～

土佐市における「地域病院協働型在宅移行支援システム」構築への取り組み

在宅看護学領域の森下安子(26期)、川上理子(35期)、小原弘子(M11期)、森下幸子(M5期:H25～)は、H22年度より土佐市地域包括支援センター・土佐市民病院・土佐市のケアマネジャー・訪問看護ステーション・中央西福祉保健所の方々と、「地域病院協働型在宅移行支援のシステム構築」に取り組んできました。

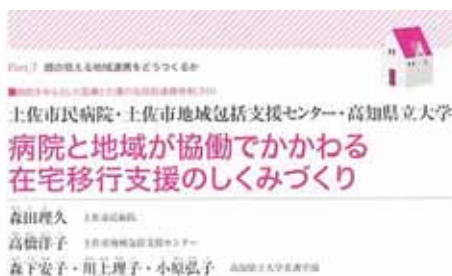
この取り組みは、当時中央西福祉保健所におられた中島信恵さん(30期)と土佐市地域包括支援センターの高橋洋子さん(34期)からのアドバイザー依頼がきっかけでした。大学教員は、まず土佐市で結成された在宅移行支援検討チームとともに、「土佐市版在宅移行支援フローチャート」を作成しました。そしてそれを活用して、高橋さんとケアマネジャー、病院の退院調整看護師が、在宅看取り等々の事例を展開した後、在宅移行支援検討チームでの事例の振り返り会議を通して、フローチャートを洗練化していきました。

その結果、土佐市では、組織を超えて病院スタッフと地域スタッフが入院中から協働で展開する在宅移行支援システムが構築され、自宅退院を実現する支援や、患者・家族の状況に応じて適切な療養先へ移行できる支援が可能となりました。実際に、土佐市民病院ではH23年度とH25年度の同時期3ヶ月間を比較すると、平均在院日数:1.2日短縮、自宅復帰率18.1%上昇がみられたほか、関わっているスタッフは、病院側「患者さんを帰さないといけなく、退院できるようにしないといけなく」という意識ができた、地域側「病院の敷居が低くなって相談しやすくなった」という意識の変化もみられています。

このシステムは高橋さんや土佐市の地域・病院のスタッフが事例展開を通して、自らの力で構築し発展したのですが、大学側もシステム構築に向けた戦略立案への支援、事例展開時のコンサルテーション、メンバーのエンパワメント、課題の明確化への支援をさせていただき多くの学びを得ることができました。

※今回の取り組みの詳細については、「看護展望」特集 退院支援・地域連携(2014.39(2))Part3「顔の見える地域連携をどう作るか」で紹介されています。

(川上:記)





ようこそ先輩!

今を生く 川出 富貴子さん(2期生)



母校で南裕子先生が学長をされていることは何と誇らしく頼もしいことだろう。卒業生の方々のご活躍もすばらしく、陰ながら応援させていただいている。そして、今の私の原点は高知女子大の自由闊達な風土にあると思っている。生前主人が「グリコのおまけが大事だよ」と言っていたことがある。それが私の今かなとふと思った。これからどう生きるのかこのことが私の最も重要な関心事でどこまで成長できるかな、これからのライフステージが本番と思える私、なんと幸せだろう、神に感謝あるのみである。

東大医学部大学院矢作直樹教授が「靈魂は生きていく」という意味で「人は死なない」という本を出され普通に読まれている。また、観察者効果が語れる量子力学も台頭し、ある会社の会長がそう思うとそうなるというSOS理論を提唱された。そうだそうだと快哉を叫ぶ私がいる。

人・もの・ことに恵まれて何だかアップテンポで動かされていくので何が計画され、どこまで行けるのかなとちょっとわくわくしている幸せな私がいる。波動の時代、銀河新年ともいわれる時代の変わり目、何とすごい時代を生きているんだろう。シュタイナーをライフワークとして自然随順をモットーに、ルールが敷かれそれに乗ればいいという感覚できて今ここに私。

現在私は三重から広島文化学園大学研究科特任教授として週2泊3日の通勤旅行をしており、博多・山口にも定期的に行くので月の過半数以上は県外生活である。その間、子供園を立ち上げ看板を降ろしたその日に地域活性と未病を視に入れた子供園と同名のほっこり処をたちあげた。今、その隣にネーミングも決まり多目的に活用できる癒しの場が提供できるよう鋭意準備中である。このためでもあるが、昨年セルフイメージを書きかえるエネルギーマスターセラピストとメンタリストの資格を取ることができた。

年齢を重ねるごとに世界がどんどん広がりご縁の方と繋がっていくことの幸せ、これまでのいいことも悪いこともひっくるめてすべて私にとって外すことのできない愛おしい大事なこともであり、毎朝「ふーありがとう。大好き、今日もいい日」と自分を労う。周りの方がお元気になるのがとても嬉しい。みんな愛おしい。

「みるもの出会うものすべて我が道しるべありがたきかな」の今日この頃である。



誇り多き我が母校 津島 ひろ江さん(14期生)



高度経済成長を背景にして、進学熱の高まりつつある時代、私は高校生でした。看護を専門学校でなく、大学で学ぶことはできないのかと進学校の進路指導の先生たちがチームで探し当て、「あったぞ、高知に」と叫ばれました。あれから50年が経過しました。看護系大学・大学院が増加し、キャリア形成が課題となっていますが、看護を選択した原点にこだわること、つまり高校生にどのような情報を提供するかキャリア形成のスタートとして意識するようになりました。

あれから50年...。学生にメッセージを送る時、「働く人生において、職場は変わるけれど、母校は変わらない。私の母校は高知女子大学」ということを話すことがよくあります。それは母校を誇りに思えるからでしょう。わが国で初めて誕生した看護系大学として位置づけ、今なお先頭を走り続けています。看護教育の大学化に貢献され、世界のナイティンゲル賞を受賞された南裕子先生が学長になられたことも、卒業生の誇りです。この度は私の歩みについて述べさせていただきます。卒業後、高等学校に勤務し、短期大学、大学、修士、博士課程で教育に関わってきました。看護系大学が急増する中で、

養護教諭養成課程を置いている看護系大学は72校となり、全体の半数を超えてきました。川崎医療福祉大学では、指定規則の改正を背景にして、臨床看護学コース、公衆衛生看護学コース、学校看護学コース(看護師と養護教諭免許取得)の3コース制で教育課程をつくりました。看護教育の中で養護教諭養成は教職だと違和感をもつ人もありましたが、今、学校では吸引、経管栄養、胃ろうなどの医療的ケアやアナフィラキシーショックへのエピペン注射、インシュリン注射などが学校で実施されるようになり、看護能力のある養護教諭養成が求められ、学校看護学コースのカリキュラムが看護教育の中に、やっと位置づいた気がします。看護系大学に限らず、養護教諭の養成が4年制大学で始まった最初の大学が高知女子大学であることも歴史に残る誇りの一つであり、養成の責任もあると思うようになりました。最後になりましたが、2年に1度、顕著な功績のあった看護師に授与される世界最高の記章である第44回フローレンスナイティンゲル記章の受章者として、久常節子さんが選ばれたことを、5月12日に聞き、14期生が京都に集い乾杯しました。

永国寺町の看護学科棟で学生時代を共に過ごし、夢を語り合った同級生の受章は、みんなで受章した気分になって、誇り合いました。卒業生にいつまでも多くの誇りを与えて下さる母校、高知県立大学看護学部のホームページを開いてみると、日本を代表する大学として、その地位を守り続けておられる並々ならぬ先生方のお姿が見えてきて、時に胸が痛みます。岡山からご健康とご発展を祈念いたしております。



11回生の絆 森岡 三重子さん(11期生)

卒業して50年近くになろうとしているが、私にとって母校は看護の知識を得たというだけでなく、その後の私の人生の中でも大きな部分を占めている。私たち11回生は、いつの頃からか「花の11回生」と呼ばれるようになっていた。名づけ親は確か故芝田不二男先生だと聞いているが、何を指して「花」と言われているのかよくわからない。私流に解釈すればクラスのまとまりのよさ、結集力の大きさ(良くも悪くも)ではないか、と思っている。

その要因はと言うとこれも私流であるが、全員が同一年齢で教育背景や、生活環境がほぼ同じで「ツーといえばカー」と分かり合える素地があったこと。そして「お祭り好き」「議論好き」が多かったこと。何か行事と言うと講義よりも嬉々として参加し、その後は「反省会」と称して食事をしながら、話はどんどんふくらみ、時には議論沸騰したこともあった。その席で翌日の授業ボイコットまでが決まってしまう、実行したこともある。ダンスパーティも計画し何回か開催した。現学長の南さんと私はどうしてかいつも荷物預かりや受付担当で、踊りの相手にはついに出来なかった。今でも同窓会で昔の話になると南さんと私は顔を見合わせて苦笑いをしている。

最後の要因は卒業後もつながりが切れていないことだと思う。結婚、子育てに忙しい1時期こそ同窓会は途切れていたが、そのときも個々には会う機会があり、なんとなく同級生の動向は流れていた。40歳ごろから同窓会が復活し、みなが集まりやすい場所でと京都で再開した。それから毎年旅行をかねて集まるようになった。東京、横浜、奈良、飛騨高山、城崎、徳島、愛媛、高知、栃木などと同窓会は続いている。その当時大学の中では「11回生が全国に出没しているらしい」とうわさになったそうである。

そして3年前同級生の南さんが母校の学長になったことをお祝いするため高知で同窓会をした。これらの同窓会の出席率は常に50%以上である。今年も高知での開催が決まっています、私たち高知勢は楽しい同窓会にしようと夏ごろから準備を進める予定である。

始めに書いたように私たち11回生の絆は強く、私の人生の重要な部分を占めているということをご理解いただけたと思う。下り坂を転げ落ちるような年齢になっているが、できる限りこのつながりが続くように願っている。



岡谷 恵子さん(19期生)

高知女子大学を卒業してこの3月でちょうど41年になる。自分の年を考えればこれだけの年月が過ぎていくことは当たり前だけれど、成果はともかく、よく働いてきたと思う。

私は高校の担任の先生に看護師になることを勧められ、いい大学があるから受けてみてはどうかと高知女子大学を紹介された。「えー、高知みたいな田舎に行くの？」と渋る私に「これからは大学で看護を学ぶ時代になる。高知女子大学は日本で最初に看護の大学教育を始めた少人数制のとてもいい大学だ。騙されたと思ってとにかく受けてみる。」と執拗に勧めてくるので、生意気にも私は「先生がそんなに勧めるのなら受験してあげよう」と言って受験し、めでたく合格して、懸命に部活に励み、メリハリをつけて勉強し、そして今の私がある。高校の担任の先生にはとても感謝している。ライフワークとして打ち込める仕事を手にできたのは、その先生のお蔭である。しかし、今もって謎なのは、なぜ私に看護の道を勧めたのか、なぜ大学で看護を学ぶようになってしまったのかということである。今日、200校を超える看護系大学ができたことを考えると、先生には先見の明があったのだろうが、なぜ今でも謎のままである。

どうしても看護師になりたいという強い思いがあったわけでもなく、母にはあなたには看護師は無理と太鼓判を押されて入学したが、学んでいくうちに段々と看護の意味の深さやその可能性に魅了されていった。その理由は明快に説明できないが、教育の中で「看護学」という専門的な学問の存在を意識できたことが大きいのではないかと思う。看護の現象に潜む何かを探求し、意味づけ、ケアの方法を開発し、実践を変化させ発展させることが自分にもできるのではないかと感じられたからではないかと思う。

私はこの8年間に2つの大学の看護学部・学科の創設に関わってきた。入学試験の面接では、多くの受験生が看護体験をし、立派だけれど似たような志望動機を述べ、人の役に立つ仕事がしたいと話す。私はいつもいまどきの受験生のモチベーションの高さに圧倒される。と同時に、この高い動機づけを維持していくのは大変だろうとか、判で押ししたような同じ志望動機を聞き、もっと自由にものを考えればいいのになどと心配にもなる。「看護学」という学問の探求の面白さをどう伝えていけばよいか、残り少ない現役の時間を、悩みながら、夢を見ながら過ごしていける幸せを大切にしたいと思う。



高知女子大学で教員としてご指導いただいた先生からのメッセージ

岡部 聡子先生(11期生)



高知女子大学衛生看護学科第11回卒業生です。私が看護の道を選択したのは、女性でも一生経済的に自立して生活できる資格を持ち、社会に貢献したいとの思いでした。卒業後は横浜で臨床看護師2年、アメリカニューヨーク大学病院、フィラデルフィアの大学病院で交換看護師として研修、東京女子医科大学で教育に従事した後、米国のウエイン州立大学大学院で学び、1976年母校の女子大学にもどってきました。

看護教育にあたり、今までの伝統や慣習、単なる経験に基づく技術のノウハウではなく、なぜこのケア、援助をするのか、論理的に考え行動できるような看護師を育てることが大事との思いでした。しかし現実の仕事環境は厳しく、裏付けとなる文献検索が困難を極めたことでした。アメリカでは、いろんな文献検索をし、読むことができたのにと、アメリカとの教育・研究の遅れを感じました。しかし救いは、若い、優秀な学生との交流、特に卒業研究の関わりでした。1年間同じテーマで討議し論文にまとめていくという過程を歩むことで、お互い学び成長できました。また、この当時は、看護系大学は6校の時代で、基礎教育のあり方、内容等について、女子大内部のみでなく、他の大学教官とも、話し合う機会に恵まれたことは、その後の看護教育に従事していく上で大いに役立ちました。看護師・保健師の統合カリキュラムの理念は、女子大では当然のこととの思いでしたが、その後、大学設立の理念等を議論するとき、女子大教育の根幹に気づかされました。

時代が変化して看護の大学教育が普通になり、看護の役割は変化して来てきていますが、根本となるところは、あの当時の女子大学でしっかり植えつけられていたように思います。女子大教育でもう一つ気づいたことは、人間の潜在能力をつぶさず見守るということ。大学の4年間で教員の見える側面は一部であり、成長する可能性を持っている。それを潰すことなく育ててもらったと思います。これも女子大の教育の原点だったと思います。

女子大退職後は、自分の身体を使って再度臨床看護の実践をしました。若い時には不向きと書いていても、いろんな経験を積み重ねるうちに変化していきました。学生時代には見えていなかった看護、いや見方が変化したのか、対象者との関係の中で学ぶことは多かったと思います。その後は、定年退職まで看護教育の道を歩んできました。看護の仕事に悩みながらも、続けられたのは、私の興味ある領域で、また私にできる看護を作り上げていけばいいのだと思うことができるようになったからだと思います。

最後に同窓会のますますの発展を祈念いたします。

梶本 市子先生(13期生)



私は1967年3月に卒業し、その後2013年3月までの46年間看護に携わり、現在は大学卒業後初めてのゆっくりした毎日を送っているところです。半世紀近くを看護に従事することができた幸せと、支えてくださった沢山の方々に感謝の念でいっぱいになります。臨床看護を13年間経験し1980年に看護教育の世界に入りました。臨床では今から思うと恥ずかしいほど幼かったのですが看護管理の立場にいたことから、看護師の看護力の個人差に素朴な疑問を持っていました。その解決策が明確になるかもしれないという期待もあって飛び込んだ世界でした。赴任前に当時の高知女子大学の南裕子先生に相談に行き丁寧に指導を頂きましたが、参考にと示してくださった授業内容のレベルの高さに呆然とし、自分にできることからやっていくしかない悲壮な覚悟をしたことでした。当時の指定規則では精神看護学が独立して位置づけられていないカリキュラムの時代でした。南先生からは精神看護学が看護学の一部であることを先ず学生に理解させることだとアドバイスを受けました。そのような時代であったことが懐かしく思い出されます。

愛媛県立医療技術短期大学(現愛媛県立医療技術大学)に勤務していた1990年代は、まだ看護の大学院も少なく看護研究の学生への指導に私をはじめ看護教員は焦っていました。そこでアメリカから帰ったばかりの野嶋佐由美先生に無理なお願いをして月1回来て頂き、看護教員対象の看護研究ゼミを開き看護研究のいろはから教えて頂くことになり、全員が本当に真面目に勉強をしたことでした。また愛媛での精神科臨床の看護力を高めようと看護教員と看護師と保健師の有志で立ち上げた多施設多職種による事例検討会は、現在も継続して開かれていくと聞き嬉しく思っています。高知女子大学には看護学部になった1998年に赴任しました。その後、高知医療センター看護局の準備を経て2005年の開院から5年間看護管理を担当し、臨床と教育の連携を実行するための看護連携型ユニフィケーション活動をスタートさせたことは、得難い体験となっています。医療や看護や看護教育界が大きく変化発展してゆく中において、私自身は時間に追われてゆとりなく全力疾走してきたように思います。

教員として学生一人ひとりを大切に育てたいという思いは、高知女子大学の教育で培われたものだと今更のように思います。そして看護管理の有り様で看護師の力は発揮できるという実感は、お世話になった沢山の臨床実習施設の看護師から学べたことです。若い頃に抱いた素朴な疑問、なぜ看護力にこんなにも個人差があるのかという疑問への解答が、個人の能力だけでなく、基礎教育、職場環境、教育体制、等複雑で広く深いものであったと理解し、対応の根底にはやはり看護師個人を大切に育てる意識が重要であると納得したことでした。初対面でも女子大卒業生と分かった瞬間から身近な人に感じられる同窓生であることを幸せに思います。皆様のますますのご活躍と同窓会の発展を応援したいと思います。

温故知新 その4



高等看護學講座		全20巻
監修 岡田清太郎 編集 橋本寛敬		
1. 基礎論	200	13. 外科学・看護法
2. 看護倫理	200	14. 整形外科学
3. 解剖生理学	200	15. 産婦人科学
4. 看護学概論	200	16. 皮膚泌尿器科学
5. 個人衛生	200	17. 心理学
6. 公衆衛生看護	200	18. 精神医学
7. 化学	200	19. 社会医学
8. 薬物学	200	20. 精神社会看護
9. 栄養学	200	
10. 一般看護看護法	200	
11. 内科学・看護法	200	
12. 小児科学	200	

高等看護學講座（株式會社醫學書院）1952年発行 全20巻

今回は、高等看護學講座の第12巻 小児科学 第4章第3節乳児の栄養法から、「1-a. 乳汁の分泌をよくするためには」をご紹介します。

※文献引用につきましては、医学書院の方に承諾をいただいております。一部現代仮名遣いに修正しています。

乳児の栄養法の中で、「人間の乳児には人間の乳汁が最良の栄養物である。特別の場合を除き6ヶ月より前に母乳を離してはいけない。母乳はできるだけよく分泌するように努力しなければならない。」と緒方安雄先生は述べられ、乳汁の分泌を良くするために、以下の10項目の方法を勧めておられます。

1. 自分の乳汁は豊富に分泌するという強い自信をもつこと。
2. 十分に眠り、疲労を回復すること。
3. 心静かにゆったりした気持ちでいること。
4. 牛乳、果汁その他の水分をできるだけたくさん飲むこと。ことに授乳前30分に飲むと有効。
5. 乳房のマッサージ。
6. 催乳剤や古くから催乳品として良いといわれている餅、鯉こく、黒豆その他を食べてみる。
7. 乳児に盛んに乳を吸わせてみる。
8. 乳房に人工太陽燈の照射。
9. X-線を間脳に照射。
10. ホルモン剤の注射（下垂体前葉ホルモン、卵胞ホルモン、黄体ホルモンなど）。

1:まず、精神論から入るのがとても日本的に見えます。2と3:自動洗濯機も紙おむつも無い時代の家事に加え、数時間ごとに啼く新生児を抱えて慣れない育児が始まった時期、これができるのか・・・昭和20年代のお嫁さんの立場・生活を考慮した現実的な提案になっていたのでしょうか・・・といいつつ1~3は、エモーショナルサポートとしてエビデンスがある方法で、現在も本当にお勧めだそうです。5:乳房マッサージが5番目の優先順位なのは、今の助産師・看護師さんにとっては不本意かもしれませんが。6:餅、鯉こく、黒豆は、お正月みたいですが、高カロリー・高タンパクを重視していたのですね。「餅」は最近、あまりお勧めではないようです。8~10:西洋医学の万能性を信じている時代性を感じますが、今考えると、母子へのリスクが恐いです。教科書で教授していることが、時代とともに変わっていくことを示してくれる興味深い例だと思えます。

教科書やその他の古い看護の文献、あるいは看護の雑誌等をお持ちの方で、寄贈してもいいとおっしゃる方がいらっしゃったら、是非下記までご連絡・ご送付【連絡後、送料受け取り人払い】下さいますようお願い申し上げます。

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部同窓会 088-847-8718 (担当:川上理子)

夏銀河～学生ボランティア活動支援



『夏GINGA』での活動

高知県立大学の学生49名が2期に渡って岩手の沿岸部を中心に東日本大震災復興支援のボランティア活動を行いました。この活動は、岩手県立大学の学生が中心となって結成された『NPO法人 いわてGINGA-NET』が全国の大学生に呼びかけて行っているもので、高知県立大学は昨年に引き続いての参加となります。

昨年は仮設住宅での地域のコミュニティ形成を目的とした住民の方々との交流や、子どもたちへの学習支援などが主でしたが、今年はそれに加え、牡蠣の養殖の手伝いや菜の花プロジェクトなど、地域の活気を取り戻し、活性化させるための若い学生の力を活かした活動も行いました。全国各地から集まった学生たちと語り合い、「今、この地域が必要としていることは何なのか。学生である私たちに何ができるのだろうか。」と試行錯誤しながら活動に取り組みました。（看護学部参加学生：3回生10名、2回生6名、1回生6名）

『いわてGINGA-NET』とは

2011年にスタートした学生ボランティアによる岩手県被災地での東日本大震災の復興支援プロジェクト。これまでのべ1万人が全国から参加し応急仮設住宅を中心としたコミュニティー支援などを行っている。災害発生時における学生ボランティアの滞在拠点整備、運営、若者のマンパワーと地域のニーズをつなぐ仕組みとして継続している。（参考：『いわてGINGA-NET』ホームページより）

～活動内容～

仮設住宅

私たちは仮設住宅に伺った際、子どもと高齢者の関わりが少なく感じました。今後の仮設住宅生活でも関わりが続いてほしいと思い、子ども達に絵を描いてもらい高齢者のもとと一緒に訪れプレゼントするという「敬老の日プロジェクト」を実施しました。中には涙して喜び、元気が出たとおっしゃって下さる方もいました。その後、子どもたちばかり集まっていたお茶っ子サロンに足を運んで下さる方も増え、活動した私たち自身もとても嬉しかったです。



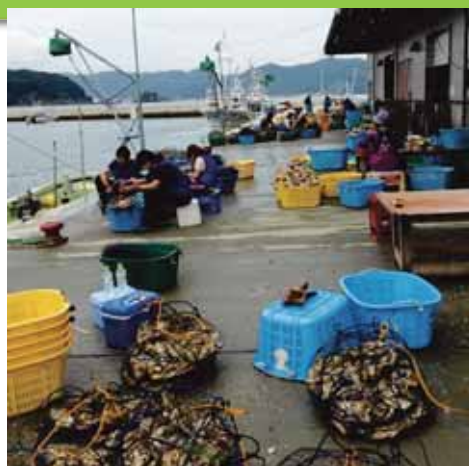
パンカフェ

2013年3月にオープンしたパンカフェでは、カフェでの接客、その他のお店のお手伝いなどをさせていただきました。休憩中にご主人が体験した震災の日の話や、来店された方の地域への思いをお聞きすることができました。最初はただのアルバイトのようだと思っていましたが、ご主人の「話を聞いてもらいたい」という言葉を聞き、何か行動することだけがボランティアではなく、こうして被災された方と向き合ってお話を聞くことも復興に大切なことだと感じました。



牡蠣の養殖の手伝い

沿岸の地域を訪れ、牡蠣の養殖のお手伝いをしました。主に、まだ小さな牡蠣の数を数え、ネットに入れるという作業を地域の方と共に行いました。休憩の時には、牡蠣や帆立を焼いてくださりたくさんのおもてなしをして下さいました。ボランティアの私たちが来て、楽しく作業することが嬉しいとおっしゃっており、私たちもたくさんの元気をいただくことができました。





学習支援

「こどものエンパワメントいわて」による学習支援活動のお手伝いをしてきました。時にはその場その場に対応して子どもたちと遊んだり、仮設住宅に入り、年配の方たちとの交流やイベントの手伝いなど学習支援以外の活動をするもありました。活動場所は毎日違い、それぞれの活動場所に入るのは1日のみでしたが、夏GINGA 1期からの学生が継続して活動場所に入っており、記録などから子どもたちの様子の変化がよくわかりました。継続して活動することは人の心を動かし、行動の変化をもたらすことができるということがわかりました。

菜の花プロジェクト

「菜の花プロジェクト」は「菜の花を植える、収穫する、なたね油を作り販売する」というサイクルから、地域を活性化し復興を目指すというもので、その活動の一部のお手伝いをさせていただきました。活動では様々な人々と関わるなかで地域の現状や地元の人々の思いを知ることができました。

すぐに結果が見えることじゃなくても、行動することで復興の力になること、あえて外からのボランティアがプロジェクトという風を吹かせることで、中の人たちが動きだすきっかけになるなど、地域の人たちが求めることについて日々の活動の中で考ながら、学ぶことができました。



おわりに

地域による違いだけでなく、震災からの月日によっても求められるニーズは変わってきており、それを正確に把握し、学生にできることを考え、実行に移せるよう模索してきました。私たちは今回得た経験や学びを今後の糧にしていきたいと考えています。学生がこのような活動をするにあたって、貴重な資金援助をいただきました高知県立大学看護学部同窓会の皆様、本当にありがとうございました。

同窓会総会ならびに懇親会のご案内

日時：平成26年7月12日(土) 18:30～21:00
 場所：城西館；高知市上町2-5-34 (tel 088-875-0111)
 会費：6,000円
 参加申し込み：同窓会事務局 Fax:088-847-8750
 締め切り：6月20日(金)



城西館は、高知の老舗旅館で、明治7年の創業以来、皇族の常宿として、また吉田茂元総理ら、各界の名士の方々も泊まれた宿として有名です。

また、近くには、坂本龍馬の生誕の地や史跡が多くあり、散策も楽しめます。

ぜひ、多くの方にご参加をいただきたいと思います。

ご寄付をいただいた方

下記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。(敬称略 平成26年1月31日現在)

丁野 八重子(4期)	公文 てつ(5期)	竹中 リツ子(7期)	大石 博美(27期)
山崎 美恵子(5期)	岡本 千代歌(5期)	明石 文子(11期)	匿名希望 4名
佐々木 正子(5期)	西田 益子(6期)	伊賀上 睦見(16期)	

寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。
 寄付金は、同封の振込用紙にてお願いいたします。ホームページでもご覧いただけます。
 ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

本会報表紙の千代像の写真は、同窓会
 役員の榎本香さんのお父様から提供して
 いただきました。土佐24万石藩主であっ
 た山内一豊公の妻千代は、一豊が織田家
 の一家臣であった頃、戦に際して馬売りの
 駿馬が欲しいが買ってお金のない夫のため
 に、嫁入りの際、父からもらった10両を差
 し出して内助の功を発揮しました。夫の
 出世を助けたことで、良妻賢母の鑑として
 歴史に名を馳せています。
 大学の動向は、大学院の改組に伴って、
 本年度から看護学研究科は修士課程のみ
 であったのが、博士前期・博士後期課程、
 5年一貫制の博士課程と3つの看護学専
 攻として体制を整えて、充実・発展をして
 いくことになりました。そこで、本会報で
 は、大学および大学院の活動について紹
 介する記事を掲載しております。

(森下・池添)

編集後記

事務局

〒781-8515 高知市池2751-1高知県立大学看護学部
 Fax:088-847-8750

ホームページアドレス

高知県立大学
<http://www.u-kochi.ac.jp/>
 高知県立大学看護学部
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>